

第一節 一月

元旦 この日の黎明に至れば各街各郷爆竹轟々天地を撼（うご）かし、春風春水一時に来たり、万戸門頭春聯新たにして、いわゆる「爆竹一声旧歳を除き、桃符万戸更に新々」の象を現わす。歳時記に曰く、西方の山中に人あり、長（た）け丈余、人見れば即ち病む、名づけて山臊という。昔人もしこれに遇わば青竹を火中に投ず。竹節爆炸して轟々たり。山臊驚きて逃ぐ。後人爆竹をもってこれに代え、もって邪気を払うとなすという。山海経にいわく、東海度索山に一大桃樹あり。蟠曲（※まがりくねるさま）三千里、その枝東北に向かう。その下に二神あり。神荼・鬱壘という。百鬼人を害するものを執って虎に食ましむ。黄帝これを法となし、これに象（かたど）り桃板をもつて戸上に掛け、二神を門扉に書きもって凶鬼を禦（ふせ）ぐものなりとなす。今の門聯（春聯・桃符）なるものこれより出ず。春聯は紅紙をもって門の両柱および上楣（※門の上の横木。まぐさとよむ）・櫃・厨・箱等に吉祥なる対句を貼布す。もし喪中にあるものは黄紙・白紙・青紙をもって聯となす。その例左のごとし。

前門扉の左右に貼するもの〈神荼・鬱壘〉または〈加冠・晋禄〉

前門柱には 〈帝徳乾坤大 皇恩雨露深〉

楹柱（はしら）には 〈天増歳月人増寿 春満乾坤福満門〉

楹柱の商家のもの 〈利如暁日騰雲起 財似春風送雨来〉

同上 〈生意興隆通四海 財源茂盛達三江〉

門楣には 〈恩 承 北 闕〉

楹柱の酒樓のもの 〈聞香須下馬 知味可停車〉

楹柱の妓樓のもの 〈一隻玉手千人枕 半点朱唇万客嘗〉

等おのおのその生業によりて異なりありといえども、ことごとく吉祥の字句を選ぶ。また福祿寿と称し、門楣の中央に巾三寸長さ六寸ばかりの彩色せる紙五条を貼付す。これ福を迎え入るの意なり。また人によりて五寸三方三角黒布に白地をもって西方仏祖と書し、柳枝に蒜根（にんにく）とともに縛して門頭に掛くるあり。これ仏祖の力をもって悪魔を駆除するものなりという。

すでに夜明くれば茶に氷砂糖を加え、茶菓を三皿に盛り、高き卓子の上に排（なら）べ、これを門口に供えて爆竹を放ち、香を焚き金紙を焼き、三跪九叩うやうやしく玉皇上帝を拝し迎年の式を行う。のち互いに相祝し年頭の回礼をなす。

賀正の名刺は紅紙の二寸ないし三寸、長さ四寸ないし五寸の中央に筆太に我が姓名を書し、住所等を記さずして配布するものなり。これを受けたるものは一々正堂の壁面に貼付し、その礼者の多きを誇るの風あり。賀客に対しては茶菓を勧む。菓は甜料すなわち甘みを帯ぶるものを勧むるものとす。このとき「食甜的汝大趁銭（甘味を食べて裕福となるべし）」、また小児に対しては「汝賢大漢（速やかに成長すべし）」、また未婚女に対しては「給汝嫁好夫（よき夫に嫁すべし）」、老人に対しては「老健康（ますます壮健たれ）」、また相互には「新年大趁銭（今年より財を得よ）」等相祝す。回礼はこれより五日までなりとす。また開筆と称して紅紙に吉祥の文字を書し、のちわずかに業務上の筆を執る。すなわち我が始筆に似たり。

「利年」としてこの年の吉方を卜す。その法まず曆と我が生日とを対して方向を定め、のち早朝その方向に歩む真似す。これを出行と称す。けだしその方向に福神ありて己れに幸するものなりという。また便所・井戸等に春聯を貼付し早朝に至りて金紙を焼く。すなわちこれらの場所も神明在すものなりとせり。

この日一家の老少ことごとく温恭謙讓あたかも大賓を遇するがごとく、悪言を放たず罵声を警め、最も器物の破壊を忌む。台湾における叱責罵詈の風もこの日は全く聞くを得ざるものなり。

この日より三日間は糞箒を門より出さずという。

昔はこの日より噴春と称する一班あり。喇叭・太鼓・銅鑼・笛・鎖哪（※チャルメラ。さなとよむ）・鬧飯（※シ

ンバルの一種。とうはつとよむ)・韻籜(※小形のどら、雲籜。いんろおとよむ)を吹奏して市街を徘徊す。各戸迎えて吹奏せしめ、紅紙に包みたる小銀貨または銅貨を与う。この班の者は皆剃髪業等の賤人なり。また一班の遊劇と称する演劇あり。市中を徘徊し富家に投げ演劇す。芸題はいずれも吉祥の意を取り八仙・慶賀・賜福天官・九老天官・千金送子・満福天官等とす。また乞食の徒あり。手に榕樹(ガジュマル)の枝を執り紅線をもって銅線を貫きたるをその枝に掛け、口に吉祥の語を唱え各戸に銭を乞う。その句に曰く、新正大発財・銭銀湧々来・一文分年々春・状元子举人孫・一文分生男子孫と唱え廻るものなり。婦人はその実家の両親に帰寧するほか回礼せず、唯一の楽しみとして闔家団欒のもとに賭博類似の遊戯をなす。小児等も拜年に得たる金銭をもってこの興に加わり、婢僕もまた得たる祝儀を投じて輸贏(かちまけ)を争う。昔元旦より十五日までは官民同楽の意義によりて官府は賭博を禁ぜず、大官豪家の家も盛んに賭博を開き、下賤の輩に至りては官衙廟宇の門前、または大道にて公然賭博をなし毫も忌憚せず、その器具は状元筹(かざとり)・骨牌・紙牌・骸子・瓊宝・銭攤(※ファンタン)を弄す。しかれども今規則厳なるため公然これを行わず、また神仏および祖先を拝す。拝するとき爆竹ならびに金紙を焼く。金紙を焼くは在天の神仏および祖先に金言を寄贈するの意を寓するなり。金紙はその用一定の制あり。神仏には寿字金紙を用い、祖先および墓地には銀紙を用い、ただ玉皇上帝には天字金紙を用ゆ。各寺廟には金炉なるものの設けありて金紙焚焼に供す。金紙の消費額はすこぶる莫大なるものにして全島周年に幾十万円を費すという。

二日 三犠醴(※三犠とは猪・鶏・鴨肉のこと。醴は酒の意味。牲醴などともいう。五牲は後述)を供えて土地の神(土地公という)を祭る。この日四方より乞食来たりて「揺銭樹(金のなる木)」と名付けたる榕樹の枝の先に紅糸にて銭を貫きたるものを掛け、各これを振りつつ各家の門頭にて「揺銭高々、生子生孫、中状元(高き金のなる木この家に来たれり。生まるる子孫は皆大官となるべし)」と唱え、その他吉祥の語を喋々して人の顔を解かしめ慈人の恵を乞う。

また平素深窓の婦人もこの日に出で神廟に詣て一般の平安を祈り、雇人媳婦のごときも郷里に帰る。

三日 他に記すべきなし。台人の迷信としてこの夜鼠族結婚す。故にこの夜の透過深更に及ばずという。

四日 接神または迎神と称す。俗説に旧蠟(昨十二月)二十四日諸神天に上りて玉皇上帝に朝賀し、この日において下界に帰還すと。この諸神を迎接するため各戸香燭・牲醴・菓物を供え爆竹を放ち金紙を焼き、神馬駕馬と称する紙製の馬、人形を造りたるものを焼き、これを上天せしめて諸神の騎馬に供しもって迎接の意を表す。旧蠟二十四日に諸神上天して、正月三日下界に降臨さるる間は神明不在中のごときもしからず、天神本部にてはその間他の天神を下降せしめて下界の巡邏をなさしめ、諸神不在中の一切の出来事を巡察し天神に報告するなり。この天神の降臨を「接天神」といい、帰上を「送天神」という。

五日 この日より市中漸次に店舗を開く。俗に「開張」という。最も遅きものは二十日を過ぐるあり。すべてその業において吉利の日を選んで開張す。開張の日はず招牌に紅色の絹布をもって綵(あや)を結び、店内には吉祥の文字を書したる対聯を掛く。銀櫃には黄金万両と書したる紅紙を貼り、すべて装飾を美にし牲醴を供え、関聖帝君(関羽)を祭り、爆竹を放ち、金紙を焼く。また平常交際ある店舗の主人等を招き宴飲す。当日は売品の特別減価をなす。

六日 清水祖師の誕生日なり。各祖師廟には綵を結び灯を点じ盛んに牲醴を備え劇台を設け演劇す。遠近の郷民ことごとく来て拝察しはなはだ熱鬧(※にぎやかなさま。ねっとうとよむ)を極む。

九日 「天公生日」玉皇上帝聖の誕生日にて俗に天公という。各戸五牲醴(猪・鶏・鴨・魚・卵)を設け爆竹を放ち焼香・焼紙し仰空九叩の礼を行う。

十三日 夜、寒壇爺(寒さを厭う神)を祭る。この神像を竹椅子に安置し、長き二本の竹に縛し、裸体の壮漢四人にてこれを舁(かつ)ぎ、故(ことさ)らに動揺せしめつつ街中を練る。各戸爆竹に火を点じてその神に擲(なげう)つ。また他の裸体の壮漢二人傘と箒とを持ちてこれを掃う。各戸爆竹を惜しまずこれに投げつけ、壮漢をして

蹙息なすあたわざらしめんとす。壯漢等これに恐れずますます各街を練り行き、爆竹を放ちつくさしめんとす。これ神の寒を厭うを助くるためなりという。

十五日 「上元」といい俗に「灯爺」といいまた「元宵」と称す。戸々香燭牲醴を供え金紙を焼き神仏を祭る。廟祠（神社仏閣）は各々堂内に彩灯を点じ火燭煌々且に達す。この夜各家の妻女出でて神に詣で年中の幸運を祈る。また各戸走馬灯を吊るし、人々竹骨に紙を貼り種々なる動物または菓物の形をなせし紙灯を作りその中に火を点じ大勢列をなし各街を練る。この中に龍灯と称するものあり。長さ四五丈、龍頭は竹骨に紙を貼り龍身は竹骨を布にて包む。龍頭龍身の中に数十の燭を点じ、これを棍頭に縛し、数人にてこれを支う。かたちあたかも大龍の蛭々（うねうね）として行くに似たり。この龍灯の官衙・富豪および熱鬧の衢（※よつつじ）に至れば乱舞玉を弄するの状をなす。真に今宵の奇観なり。土人これを弄龍と称す。

街中の壯漢またこの夜廟前において「弄獅」をなす。弄獅とは合境平安を祈る一種の驅邪祈祷にして、獅子の面を木にて作り獅身は布にて作る。人その中においてこれを舞わしむ。また一人長刀を以てその獅を截（き）らんとするものあり。これを「劊獅」と称し、相互乱舞しかたわら鑼鼓をもってこれを囃す。

なおこの夜この外に種々の迷信あり。これ迷信の部に詳述す。

二十日 昔二十日前後に文武・官衙とも開印の式を行い公務を行う。これを開印という。開印・封印の日時は欽天の上契批准を経、所轄の各地方衙門に通知し、各衙これを公衆に掲示す。現今台湾の各廟の開印を行い門扉を開くはこれに則れるものなり。

昔立春、前一日、各地方長官は春を東郊へ迎え農功を重んず。まず東門外にて芒神土牛を作り、歳の干支によりて芒神土牛の形色を弁ち、そうして正気を迎え歳時を占う。当日各員正装して芒神土牛の前に案を設け、果・酒・香・燭を列べ一跪三叩了（おわ）って入場す。鼓楽儀仗を先導とし、綵旗に「春は人間（※地上世界のこと。じんかんとよむ）に至る」の四大字を書し、各差役は各造花を携う。これを春花という。翌朝長官は式場に至り土牛を棚より下ろし、綵をもって三打し、「風調順雨、国泰民安、禄位高陞」と唱う。これを「春鞭」という。迎春終われば人民争うて土牛の土を持ち去り、牛あるいは豚小屋に撒布す。かくのごとくなすときは疫を免れかつ肥ゆという。

第二節 二月

一日 毎月一日を朔、十五日を望という。朔望には文武官、黎明に祝典勅定の各神廟に詣祀す（文廟・武廟・城隍廟・天后廟・観音廟・風神廟・雷神廟・火神廟、および歴代功臣の廟なり）。

二日 福德正神の誕生日。俗に土地公誕という。この日土地公園廟には綵を結び灯を懸け演劇す。庶民は牲醴・香燭・爆竹を供え廟に詣で祀りをなす。

商家にては夜に入り牲醴を徴し店主・番頭・手代まで飲食す。これを「牙祭」という。十六日に行う「做牙」また同じ。商家は以降毎月二日・一六日に牙祭を行う。年の初めの牙祭なるをもって「頭牙」と称す。

三日 文昌公の誕生日にして、童生・秀才・廩生・貢生・舉人（※いずれも科挙合格者の称号）、および書房教師等これを祭る。しかるに一般人民はこの月十七日をもってこれを祭れりという。

この月の丁巳の日孔子祭を行う。孔子廟祭のことは祭祀の部に詳らかなり。

十二日 花朝と称し百花の誕生日とす。本日晴なれば百果豊熟すと称しこれを祈る。

十九日 観音菩薩降誕日とて廟に詣り祭を行う。各戸寿桃・寿麩菓子すなわち精進供物を作り、香燭・爆竹を携え廟に赴き祭をなす。

第三節 三月

三日 上巳として牲醴を供え神明を祀る。この日は玄天上帝の生日なり。この日土人は慈角糰（蓬団子）を作りて神を祭る。

清明節 清明節は三月十日前後にしてその前後三日間は各土葷素（※肉や野菜の入った料理）・酒飯を携え墓前に排べ焼香・焼金・爆竹を放ち紙銭を墓牌上に置きこれを掛紙・厚紙と称す。神明には祖先の霊を祭るとともにあわせて培墓（墓の掃除）ならびに上墓（墓詣で）拾骨等をなす。上墓には牲醴・菜飯・酒等を持ち行き墓前に供え焼香・焼紙をなしかつ紙銭（銭形の紙）を墓前または墓上に置き墓前に号泣してこれを祭る。拾骨は墓を発（あば）きて已に枯骨と化したるものを拾いてこれを洗い、黄金と称する瓶に収めて改葬す。これを風水（蹄鉄型の墓）と称す。

清明前後は天気晴朗なるゆえ、土民郊外に杖を曳く。古人の踏青に倣えり。

十九日 太陽の誕生日として各戸牲醴を供え、金紙を焼き、爆竹を放ち、香を焚き空を望んで跪拝す。

二十日 註生娘々の聖誕日なり。この神は子を授くるの神明なれば、もっぱら既婚の婦人、廟に牲醴を担い行き、神前に供え香を執り、燭を点じ、焼金し、祈願す。この神に祈願するときは、必ず子を孕むという。

二十三日 天上聖母すなわち媽祖の生日とす。この日天后宮に綵を結び灯を懸け演劇し熱鬧す。民人性醴香花を携え拝祭す。しかるに北港および台南等三月十三・十四日をもってこれを祭る。その熱鬧五月十三日と同じ。

第四節 四月

二日 太子爺の祭日にして信者牲醴を供し祭る。

八日 浴仏節とす。この日士女の仏廟に香を進むるもの多し。寺および堂においては甜茶を備う。

第五節 五月

五日 短太陽節または端午あるいは天中節として俗に五月節という。この日各戸紅紙して菖蒲・艾（よもぎ）を束ね門に掛け、または黄紙に「蒲劍冲天皇斗現、艾旗扞地神鬼驚」等の聯を門に貼りもって百邪を避くとなす。

またこの日正午に粽・牲醴・香黄酒を家廟に供え爆竹を放し香を焚きこれを祭り、一家粽を吃し酒を飲みもって身体を健康を祈る。また香黄酒を壁下または垣根に撒布するときは毒虫悪蛇を禦ぐという。

男女とも頭髮に艾葉および榕樹を挿す。けだし「挿艾較勇健、挿松較勇龍」の俗言による。

この日菖蒲および艾葉を湯に入れ、これをもって身体を洗うときは百病を防ぎ、婦人は纏足の臭気なく、小児は腫物出でずという。その他迷信の部に詳らかなり。

この日土人扒龍船（※ペーロン）と称し、船を江に浮かべ盛んに競艇の技を演ず。龍船とは舳（へさき）に龍頭あり。艫（せんび）に龍尾あり。船体に龍鱗を画きたるをもつて名あり。

一般の漕手十五名より三十名ばかり、さかんに鑼を鳴らして進む。一回の競艇は二隻ないし三隻をもって行方を定めとす。このとき観覧者、雲霞のごとく真に壯観を極む。けだしその屈原が汨羅に投じて死せるを吊（とむら）うに出ずという。

十三日 関帝廟および城隍廟の祭日なり。城隍は全島至るところにあり、台北大稻埕にあるもの最も靈驗顯著なりとし、民人の参詣するものすこぶる多し。この日城隍廟内は意匠を凝らして裝飾をなし、綵を結び灯を吊るし、月の九日より参詣者陸続として来たり。牲醴を供え引き続き十三日に至る。廟内焼香・焼紙熾（さか）んにして火煙濛々咫尺（わずかの距離）を弁ぜず。老若の参詣者また立錫の地なし。もつてその熱鬧の壯観憶うべし。この日神輿各街を巡境す。また各廟の神輿すなわち天上聖母・観音仏祖・広沢尊王・保生大帝・玄天上帝・五谷先・水仙尊王・関帝爺・その他あらゆるところの神輿これに従巡し、行列の人数数万人そのうち幾十団の音楽団・変装団・武將変装団・神具捧持団・乗馬団あり。その他香を点じてこれに従う人数千人。またそれに「芸擱」と称し、盛飾

する台に良家の幼女・妓女等の演劇の状に装いたるものを載せて人夫数人にてこれがかつぐ。また一間ないし二間ばかりの板を数枚接続し、これに脚を付しその上に変装者を乗せてかつぐものを「蜈蚣（むかで）擱」と称す。けだしそのかたち百足に似たるあるをもってなり。また一丈余の竹馬を作りこれに乗りて列に加わりいる数団あり。その壯観いふべからず。また街路の南側は人をもって埋め、主神の神輿および各廟の神輿通過の際、盛んに爆竹を放ち焼香・焼紙して一家の平安を祈る。その熱鬧あたかも鼎の湧く（※鼎の中の湯が沸き返るように、物事が混乱して騒がしい様子）がごとし。聞くこの日、焼香焼紙に費消する高六万円に及ぶという。

第六節 六月

六日 宋の祥符四年（※西暦一〇一一年）詔してこの日を天祝節（てんきょうせつ）と定め、書画衣服を曝す。これを曬黻と称す。またこの日、猫犬を洗浴すれば病を除き、虫を除くという。台人これにならい「皇帝曝龍服」と称し、各家衣服を出し曝すときは触虫の憂なしという。

十五日 「半年」と称し、各家「円仔（団子）」を作り家神を祀る。

十九日 観音菩薩得道昇天日とす。廟前に演劇し、民家には牲醴を供え、金紙を焼き、爆竹を放ち、仏駕市街を巡境するを跪拝す。また形磬のごとき銀牌を作り、観音名を彫み小児の胸に掛く。これを掛鎖牌と称す。

第七節 七月

一日 地藏王廟の開門の日にして、俗に「開鬼門（地獄の門開き）」と称し、月の三十日に至り閉ず。この間無縁の鬼（餓鬼）陽間（娑婆）に出で盛んに活動し、人間に禍害を与うといい伝う。ゆえに各戸菜飯等を門前椅子上または卓上に供え焼香・焼紙してこの餓鬼に供す。餓鬼満腹せば人に害を加えずという。

七日 七娘媽生、または乞巧節、七夕と称す。この夜各家の女、生花・果物・白粉・臘脂（べに）・油飯等を門前の卓上に供え、焼香・焼紙し天に向かって祈願をなし、また臘脂・白粉の一半を天に向かって撒布し、一半を己に用いるときは西施の如き美人となるといい、また乞巧会と称し、針と糸とを戸外に持ち出で、弦月に向かって糸を針孔に通ず。もし通じ得れば将来裁縫の巧手となるといい。また掛鎖牌と称え、銀牌に七娘媽の三字を刻し、小児の頸に掛け置くときは無病・無災なりという。

十五日 中元節または七月半と称し各戸牲醴菜飯等を奉供し、焼紙放炮焼香して祖先の霊を祀る。この日また盂蘭盆とす。盂蘭盆は俗に普度と称し、私普と公普の二種に分ち、一般に金銭を惜しまず大に施行す。ただし必ずしも一定してこの日に普度を施行するものにあらず。私普は七月一日より同三十日までの間において甲街は何日、乙街は何日、丙庄は何日と定め各々旧例によりて施行す。各戸は「普照陰光」「慶讚中元」等と対処したる灯を門戸に吊るす。開鬼門より外出しいる無祀の餓鬼を再び優待せんため、三牲・五牲・菜飯その他の珍味を門口に排列し、焼紙・焼香して餓鬼を超度す。夜に至りてその供物を料理し朋友親類を招き大宴を開く。この普度施行にあたり、もし餓鬼に満腹させる珍味なきときはたちまち鬼の祟りを受け病み、養飼せる豚・鶏・鴨の類に害を及ぼすという。

公普は各所の祠廟において施行す。これ協同一致相提携して物事に当たるものにして、例えば台北の大道公廟（大龍峒にある）泉州同安県人、祖師廟は安溪県人、龍山寺は惠安・晋江の二県人の氏子等一保・二保・三保に区域を設け、各氏子ごとに協力同心し祭事を挙行す。大道公廟属の氏子はこの月十二日に、龍山寺属の氏子は同十三日、祖師廟の氏子は同二十日に、各その所属の廟において普度を挙行す。この普度は各派とも競争的に囊底を振って盛んに供物を供え祭る。

各派所定の公普施行につき招魂のため、杉丸太および竹篙（たけざお）よりなる高さ二丈ないし五丈余の絶頂に灯を吊るし、これを招魂の標目として廟の内側に立つ。これを「灯孤」と称す。幾億万の餓鬼はこの目標により集ま

るという。そうして廟宇には結綵・懸灯十二分の粧飾を施し、五名ないし七名の和尚昼夜間断なく、一条ないし二条の盂蘭盆経を念誦す。いよいよ施行の日に至れば廟の前庭に孤棚（供物を配列する台にして炉主これを準備す）を準備し各戸三牲・五牲および糶粽・孤飯・満席・豎磔（皿）等（孤飯には普照陰光と書したる三角形の旗をその他の供物にはすべて線香を立つ）山海珍味の供物を孤棚上に排列す。供物のうち、全煮せし数百頭の豚羊数千疋の鶏鴨あり。あるいは鶏・鴨・羊・豚もしくは海産物をもって幾多の山水・人物を模造したるあり。あるいは鶏・鴨・魚肉を堆積し山に擬し、あるいは銀紙銭・金紙銭をもって人家を模造する等その実況言語につくしがたし。以上のごとくにして五名ないし七名の和尚念経し、孤魂を済すると同時に数カ所に設けある台は開演せられ、打鑼・打鼓の響きは耳朶を破り看者の群集立錐の余地なきに至る。

超度了（おわ）れば打鑼一声の合図をもって幾千百の群衆勇往猛進して孤棚上に排列しある供物を一瞬時の間に掠奪す。これを「搶孤」と称す。そのありさま実に戦場のごとく喊声天地を動揺す。この搶孤に際し往々死傷者を出すことあり。ゆえに甲申年巡撫劉銘伝令を布きこれを禁ぜりという。しかるに今なお田舎において年々盛んに举行せらる。

土人曰く、鬼の動作はすこぶる早く、かつ畏（おそ）るべし。鬼の食しつある供物を、鬼より以上の早き所作をもってこれを強取するときは、鬼避易し、吾人人類に害を及ぼさず。ゆえに無病息災なるを得と。

放水灯・各廟属氏子公普、举行の前夜において、鬼歓迎のため幾数万張の灯籠を作り、灯提行列をなし、江辺に至り水流に臨んでその灯籠を放つ。これを放水灯と称す。举行に付き炉主の下に大柱と称え三名ないし六七名の頭家、並びに主会・主照・主壇・主普・主事・天官首・水官首・地官首等の役員を置き、炉主これを指揮し、各その職責を全うす。提灯行列にあたりこれらの役員は各自職名を記したる灯、あるいは普照陰光と大書したる灯を捧げて徐行す。これら役員を灯を称して水灯頭という。その他付属として大竹桿（さお）をもって木の葉形に一丈ないし三丈余りの方架を作り、紙または玻璃にて貼りたる灯を幾十百架ごとに吊るし、壮丁これを担う。これらの灯は数街・数庄、結合し同姓を募りあるいは同業者を一団とし資を醸（出し合い）して作りしもの多し。その他各自に山水・花鳥を画きたる灯、または魚鳥形の紗灯を頭上に戴き、あるいは灯を捧げ、各団体をなして連歩す。各団体の両側は幾千百の装丁各巨火（たいまつ）を捧げて相伴う。その火は幾百万の灯火と相映じ焰々天を焦がし、各団体ごとに伴う楽隊は清亮たる太平の譜を奏し、鑼鼓の響き耳を襲す。観者堵（かきね）のごとくすこぶる熱鬧を極む。ただし行列後、灯を水に放つ。これ行列者の所持するすべての灯を放つにあらざして炉主以下各役員を捧げたる、水灯頭のみ和尚随行してこれを放つものなり（すなわち古の流火の所謂なり）。

第八節 八月

三日 司命灶君の聖誕日俗に灶君生と称し、寿麵・清茶・香燭を供えて灶君の寿誕を奉祝す。

十五日 中秋節又太陰菩薩の聖誕となす。各門戸に綵を結び灯を吊るす。この夜月下に香案を設け生花・水果・月餅（中秋餅）を供え、焼紙・爆竹を鳴らして月娘（月）を拝す。拝祭終わりて一家団欒（重に婦人）婦人月下に酒を酌み、中秋餅を吃し相楽しむ。また読書人はこの夜皓々たる月下に一同相会し、詩を吟じ歌を称して相楽しむ。これを賞月の宴と称す。またこの日書房の先生は生徒一同に中秋餅を与う。生徒これが返礼として紅包（二十銭内外）を贈る。中秋餅は麵粉と砂糖にて製し、状元・榜眼・探花・三会・四進・二举・秀才等清国時代の学位を書し、その大小によりて値を異にす。生徒この月餅を吃するときは右の学位を得て大いに出世すとなす。またこの日一般に賭博流行しこの中秋餅を賭して勝敗を争うという。

この夜正月十五日の夜と同じく、未婚の男女結婚を求めんがためまた子なきは妊娠を願ひ、あるいは利益を得ん

がために聴香を行う。

二十三日 広沢尊王誕生日にして、廟内に牲醴（肉と酒）香燭を供え、綵を結び灯を懸け、劇を演じ、また神輿巡境し、熱鬧はなはだ極む。本山は泉州南県鳳山寺なり。

第九節 九月

九日 重陽節とし俗に登高日という。縉紳（※官位の高い人）の家には親友を招き飲宴す。あるいは近傍の山に登りて遊玩す。書に曰く、費長房（※後漢の方士）その徒、桓景に告げていわく、汝の家に九月九日必ず災いあり。よろしく家人をして綵囊（袋）を作らしめ、盛るに茱萸（ぐみ）をもってし、高きに登って菊花酒を飲みそうしてこれを避けよと。桓景命のごとくす。夕刻家に帰り見るに鶏犬ことごとく死す、と。後世、人の高きに登るはこれに基因すという。

第十節 十月

十五日 十五日を下元という。水官菩薩生誕日とす。俗に三界公誕という。道経にいわく、この日水官下降して人の罪福を校（ただ）すと。この日毎戸牲醴・香燭を供え、焼紙・放爆をなして祭る。また三界公会を組織し平素また本島人の家の堂頭の空宙、四五尺のところ上方より一對の紙灯（天公灯と称す）および一個の香炉を吊るしあるものあり。これ年中諸神の祭祀あるごとに火を点じ、香を焚き、家内の平安を祈るものなり。この日もまた灯下に卓を置き、五牲・紅龜（※紅色をした亀形の糕（ケーキ））等を供え、爆竹を放ち、焼紙、焼香して一家の平安を祈る。

第十一節 十一月

冬至は冬至節、また長節といい、昔各官衙において大いに宴を張れりという。民家は団子を造る。これを冬節丸という。家紙および祖先の位牌に各三碗および三牲または五牲、ならびに香燭を供え、爆竹を放ち、紙を焼きて祭りとす。また団子一二丸ずつ門・窓・卓・櫃上に置き、その一年中の労を謝し、また益々福氣ならんことを祈る。五六第以上の古き神主（位牌）あるときは家廟すなわち祖廟に合祀す。これまた牲醴を供え盛んなる宴を張り人を招く。この合祀は冬至に入る十日前後に行う。これを「祭祖祠」と称す。

また土地の売買・小作・入質等は八月十五日に予約をなし置き、この日をもって本契約をなすを慣例とす。

第十二節 十二月

十六日 「尾牙」と称し商家農家一般に牲醴を神に供え、なお雇人・婢僕等を饗応す。この時雇解・進給等をなす。

元来本島において毎月二日および十六日を「做牙」と称し、十二月十六日を尾牙と称し、最も重きを置く。

また一年中毎月二日・十二日・二十二日（または一日・十一日・二十一日）の三期を決算日となし、商家の取引はこの日において決算をなす。

二十二日 「尾期」と称し、一年最終の取引決算日となし、商家は午後十二時までにおいて往來の決算をなす。

二十四日 「送神」と称し、この日各地の各廟の神明下界人間の善為悪行を天上玉皇上帝に報告のため昇上す。故に各家において早朝よりその行を送るために三犠五醴を供え、爆竹を放ち、金紙を焼き、また紙にて神馬・将馬を作りこれを焼き天上の見送りをなさしむ。

この日より各家掃箒をなし屋内を清潔にす。これを「掃垢」と称す。掃箒終わって春聯を換え迎年の準備をなす。

土人曰く、家屋の内室・堂・家具至るところに種々なる神明ありて、常にこれを移動掃箒するときは神明の怒りに触れたちま疾疾病に罹るといふ。故にこの日各神上天不在を期として大掃箒を行う。この日はいかに家具を移動

し、室堂内を掃箒するも神の祟りあることなしという。

この日より各所に「売聯」なる者出でて春聯を売る。春聯は士人・商家・農家・酒樓・妓樓等その他あらゆる人民の門に貼付するものなるも、文句はその職業によりて同じからず。用紙は多く紅を用いまた祠廟の門柱にも聯を貼し、また祠廟の門扉を閉じ外部より紅紙の封印をなし出入を禁ず。これ神明すでに上天して不在なるをもって開門の必要なきを以てなり。昔この日をもって各官衙の門扉を封印し事務を休止し、翌年二十日に居たり開印し執務をなすはこれに基づけり。そうして各祠廟もまた翌年正月四日に至りて開封することまたこれに基因せるものなり。

春聯の文句に置いてはすでに一月の部に举例せるも、なお哀輓（※死者をいたむ）句およびその他二三を挙ぐ。

哀輓 （春紅桃葉鶯啼濕 夜雨梅花蝶夢寒）黄色

（天不老耆旧 人皆惜老成）白色

（桃花流水杳然去 明月清風何処遊）青色

祖廟 （祖功垂福降 宗徳布春光）紅色

寺 （塵根禱即去 清福種方生）紅色

道士壇（雲霞仙路近 松竹草堂深）紅色

齋堂 （五葉花開叢法寶 十方飯笠等珍味）紅色

結婚 （連理枝頭騰鳳羽 合歡筵下對鸞杯）紅色

等の文句を用う。

三十日 この日を「越年」と称す。午後辞年の式をなす。この式は家廟または正庁の神前、または仏祖に三牲または五牲を供え、香を焚き金紙を焼き、三跪九拝して辞年の式を了（お）え、のち盛んに各家と物品の贈答をなす。夜に至れば辞年式に供えたる牲醴を調理し卓上に排列し、卓下に火炉を置き、一家これを囲みて和氣の間に酒を酌み、飯を喫す。これを囲炉と称し、この夜悪口罵詈の言を発するを禁ずという。

第十三節 年中行事以外の祭日

右年中行事に掲げたる外、各人各戸その信仰する神仏の誕生日には牲醴を供え焼紙焼香して礼拝す。今その仏の誕生日と称するものを掲げ参考に供す。

【省略（別途エクセルファイルにて作成）】

右のごとくにして一々これを祀るときは日も足らざるべく、また祀らざれば禍ありとは実に厄介千万というべし。